

各地の民話・伝承

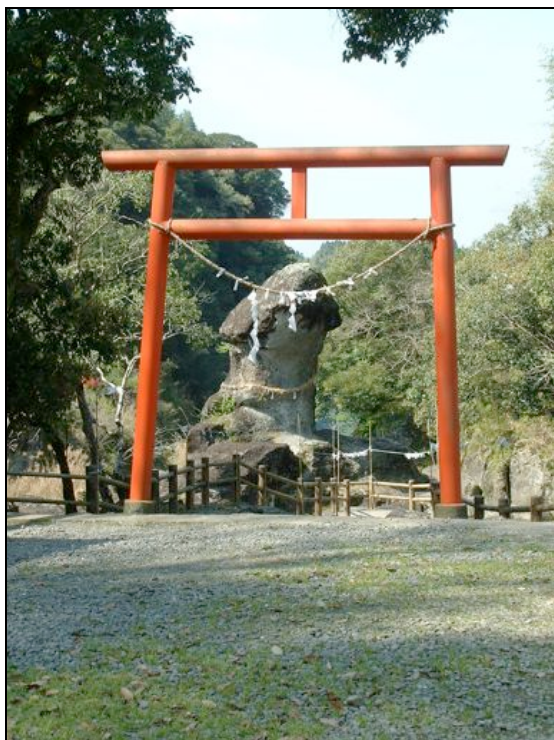
谷口 実智代

宮崎の巨石と伝説

七月に宮崎県で開催される第五回イワクラサミット。かの地を探訪する前に、現地に残るイワクラ伝承を知っておく事は無益な事ではあるまい。膨大な数の伝承が伝わる神話のふるさと、宮崎県。その中から宮崎県在住の会員、谷口氏に選び、編んでいただいた幾つかの伝承を紹介

神話のふるさとと呼ばれる宮崎は、「古事記」や「日本書紀」の舞台である。記紀にまつわる土地を訪ね、現地の風景と伝説から、記紀に記された神話がなにがしかの实話を含んでいるのではないかと、梅原猛氏は著書「天皇家の“ふるさと” 日向をゆく」で述べておられた。であれば勝者の歴史である記紀とは別に、敗者の伝説もあるのではないか。実は、あるのだ。ここではそんな伝説を「巨石」をキーワードにご紹介したい。

● 小林の陰陽石
小林市の東方、小林駅から北に五キロ、浜之瀬川上流の三之宮に陰陽石はある。陽石は高さ十五、十七メートル、陰石の周囲は五、六メートル。男女一対がひとつの岩になっている。昇天の二匹の龍が、妙齢の美人に見惚れて降り、神通力を失ってそのまま石になったという。別名竜岩、または夫婦岩ともいい、昔からよろず生産の神として信仰されている。



写真：小林陰陽石

●鬼八の塚と力石

その昔、乳が窟に潜んでいた荒神・鬼八(きはち)は、村人に災いをなした。ところがある日、神武天皇の兄弟で、天皇の即位後高千穂に帰郷した三毛入野命(ミケヌノミコト)は、鬼八の美しい妻「阿左羅姫」を不憫に思い、鬼八を討つ決意を固めた。三毛入野命は丹部大臣・宗重と若丹部大臣・佐田重と共に鬼八を倒す。しかし鬼八は一晚で蘇生してしまう。そこで改めてその体を3つに切りわけ、3ヶ所に埋葬した。現在その鬼八塚はそれぞれ「胴塚」「手足塚」「首塚」として、自然石が祭られている。また、高千穂峡から高千穂神社へ続く遊歩道沿いに、鬼八が手で投げたと伝えられる巨石「鬼八の力石」が祭られている。

●鵜戸神宮のお乳岩と亀石

山幸彦(彦火火出見尊)が、兄の海幸彦(火照命)の釣り針を探しに龍宮に赴かれ、海神の娘・豊玉姫命と深い契りを結ばれた。山



写真：鵜戸神宮亀石

幸彦が龍宮から帰られた後、身重になった豊玉姫命は「天孫の御子を海原で生むことは出来ない」と山幸彦を追ってきた。急いで産殿を造っていたが、屋根の鵜の羽の茅も葺き合わぬうちに御子・日子波限武鸕草葺不合命(ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと)が生まれた。しかし、豊玉姫命出産の際、海神のご本体である鰐(わに)の姿に戻ったところを山幸彦に覗かれたので、豊玉姫命は御子を残り童宮に帰ってしまった。御子のため乳房を置いていかれた岩を「お乳岩」といい鵜戸神宮社殿の後方に祭られている。また、父だけでは子育てが大変であるろうと妹の玉依姫命を寄こし、鸕草葺不合命は元気に育たれ、後に玉依姫命と結婚する。その玉依姫命が乗って来たのが亀で、現在の「亀石」だと言われている。この亀石には枡形の穴が開いており、そこに素焼きの粘土で出来た運玉を投げ入れ、みごと入ると開運すると言い伝えられている。



写真：母智丘の石峰稲荷

●都城・母智丘の石峰稲荷
母智丘（もちお）神社の裏手には巨石郡があり、石峰稲荷と呼ばれている。そのもつとも大きな巨石は二十畳敷きの広さがあり、その下には六畳敷き、三畳敷きの広さの岩穴があり、白狐、赤狐、白蛇が住んでいるといわれている。また、この石峰には隠れ世の国があり、特に選ばれた者のみが行くことが出来るという。昔、近くの

寺の飯炊き男の三蔵が馬草刈りに出かけたところ、餅尾（母智丘）の隠れ国から琴の音が聞こえてくると言われる琴の瀬戸で白髪の老人と出会い、丘の頂の美しい一軒家に誘われた。やがて碁を打ち始めた老人を観戦していると、寺や家の者が三蔵を探しに来た。まだ帰りたくないと言った老人は「決して声をかけるな」と言う。黙っていると、三蔵を探し回る者

たちは、語を打つ老人の横を通っても、三蔵に突き当たりそうになっても気付かずに引き返していった。しばらくしてから老人に促され、隠れ国のことは一切他言しないよう約束させられて戻ってみると、わずか三日ばかり遊んでいたと思っていたのに三ヶ月もたっていたという。

以上、比較的有名な巨石とそれにもまつわる伝説を紹介したが、細かな「イワクラ」についての伝説は、まだたくさん残されている。しかし、近年開発で破壊されたり、市町村合併などの影響で地名が変わったり、なくなったりして、伝説だけは残されたものの正確な位置がわからず、事実上消えたイワクラも少なくない。

イワクラと伝説がセットになつて、初めて見えてくるものもある。たとえば、高千穂に残る天孫系の伝説が岩屋（洞穴）にまつわるものが多くに比べ、巨石やイワクラは国津神と思われる地元の民にまつわるものが多いと思われる点。

また、日本最大の陰陽石と言われ、今では話すこともなくなるとはばかられる小林の陰陽石には、龍神と女性の結びつき、そして付近に縄文遺跡もあることから、竜神を祭る巫女、もしかすると縄文時代に存在したという蛇巫女の信仰が伝えられた可能性はないだろうか。巫女と言え、観光地にもなっている鶴戸神宮は、もともとは二人の海神の女神を祭っていたのではないかと想像が膨らむ。このようなイワクラに対する考察は、考古学的資料だけでも、また、史学や民俗学的資料だけでも真実は証明されない。それらの資料すべてと、地質、当時の環境など総合的に考えてはじめて「人の暮らしと祈りの心」が見えてくるのではないだろうか。

【参考文献】

宮崎日日新聞社「ひむか神話街道」
鶴戸神宮社務所「鶴戸神宮由来書」
瀬戸山計佐儀「日向の国 諸島の伝説」